

新刊紹介

平田昭吾・根本圭助・会津漫画研究会

『日本のレオナルド・ダ・ヴィンチ 手塚治虫と6人』

(ブティック社、2005年)

森 幸 雄

あの手塚治虫がぜひ描きたいと思っていた雑誌があった。それが『冒険少年』であったという。本書で紹介されているエピソードのひとつである。

本書は、手塚治虫と、戦中から戦後にかけて活躍し、手塚に影響を与えた6人の作家の活動を、活動の場であった少年雑誌、とりわけ「まばろしの雑誌」と呼ばれている『冒険少年』(のちに『少年日本』と改題)とのかかわりから取り上げたものである。取り上げられている6人の作家——海野十三、小松崎茂、山川惣治、永松健夫、杉浦茂、横井福太郎は、それぞれ小説家や漫画家、画家として、戦中から戦後にかけて大活躍したが、次第に「忘れられた」存在となつていった作家たちである。近年、さまざまな分野に与えた影響力が再認識され、再び注目されている。

執筆しているのは、手塚治虫の内弟子で後にマネージャーとなった平田昭吾や、小松崎茂の弟子でイラストレーターの根本圭助など、作家本人や家族などから直接話を聞ける人々であり、これまでに紹介されたことのない話が豊富である。またこの中で、『冒険少年』の発行者・編集長であった戸田城聖や、『冒険少年』『少年日本』の編集者、後に編集長となった若き日の池田大作の様子など、貴重なエピソードも記されている。本稿は書評ではなく、こうしたエピソードのいくつかをふくめた本書の紹介である。

冒頭のエピソードは、ある日、雑談のうちに、『冒険少年』の話題となり、手塚自ら、誰も立ち入らせないプライベートルームから、数冊の雑誌を持ち出して平田昭吾に語ったものである。

手塚は『冒険少年』を手に取り、パラパラめくりながら、「海野先生も描いているし、山川先生も小松崎さんも描いていてね……。この本からは何か特別な情熱みたいなものを感じたよ」(136ページ)「僕は作品発表の場を与えてくれる依頼があれば、どんな媒体にでも描いてみたい思っているけれど、自分からは是非描きたいと思った雑誌は、当時はこの本くらいだったねエ……」(同上)といっていたという。

手塚に特別な情熱を感じさせた雑誌の姿勢は読者とのこんなやり取りにも表れている。「懸賞の当選発表には氏名も出して下さい」との投書に対して、編集部は「御存知のように紙不足のため頁数が少いのでちょっとした空間もない程なのです。どうかお許し下さい。嘘はつきません」(54ページ)と紙上で回答している。このエピソードを紹介した漫画評論家の池田憲章は「『こういう読者を忘れてはいけない』という戸田編集長の思いさえ感じてしまう」(同上)と述べている。

読者も『冒険少年』を楽しみにし大切にしていた。こんな読者便りが掲載されているという。『冒険少年』を出版する日本正学館から冒険少年文庫発刊の案内を受け取った読者が「冒険少年の記者先生、おはがきどうも有難うございました。面白そうな本の名前を見ただけでも、もう胸がわくわくするように欲しくなる冒険少年文庫。買いたいなあと思いました。しかし、僕の家は『大宝窟』の山住健太郎君や小藤太のおぢさんのように貧乏です。でも立派で面白い冒険少年だけは、納豆売りをやって、ようやく買っているのです。だから文庫の方はお断りします。冒険少年は毎月買って僕の本立てを美しくかざります」(同上)

『冒険少年』への情熱は編集者の行動にも表れている。海野十三は、戦前から推理小説・少年向けの科学小説の作家として有名であったが、戦後は精力的に少年向けの科学小説を執筆していた。戸田城聖編集長は自ら執筆依頼に訪れ、子供たちにおもしろくて楽しい、しっかりとした雑誌を読ませたいと海野十三に語り、海野十三は多くの連載を抱えているにもかかわらず、『冒険少年』への連載依頼を受けている。こうして連載されたのが人気小説の『怪星ガン』であるという。

海野夫人の記憶では、戸田編集長はよく原稿取りにやって来て、原稿を書く海野の傍らで子供達の環境や社会問題、家族の話をポツリポツリと話していたという。さらに「戸田さんはどこか教頭先生みたいに静かな方で、とっても印象に残っている」(51ページ) また「編集部の人は、皆姿勢のいい人ばかりでとても礼儀正しかった」(同上)ともいっている。

海野の『怪星ガン』の挿絵を描いていた小松崎茂の姉の富美子さんは「『怪星ガン』の原稿を届けてくる池田大作青年を憶えていたそうだ。言葉少なで礼儀正しい青年で『冒険少年』の編集者はそういう人が多かった」(52ページ) という印象を述べている。

手塚治虫は、アニメ部門である虫プロの経営が困難になり、月産600ページという膨大な量のマンガ連載をこなさなければならなくなってしまった(226ページ)にもかかわらず、『冒険少年』や『少年日本』の編集部の情熱を受け継ぐ『希望の友』『少年ワールド』『コミックトム』といった潮出版社の少年少女向け月刊誌に、『ブッダ』のような手塚の人生哲学を表現する重要な作品を長期にわたり連載する。

『希望の友』などに長期にわたり連載された『三国志』などの横山光輝による大長編マンガは、マンガの表現領域を拡大させた。現在、日本で誕生し世界に拡がる大衆文化の重要な領域のひとつとなったマンガやアニメの発展を見るうえで、『冒険少年』や『少年日本』やその流れをくむ雑誌が果たしている役割が重要であるとみることが、身贊頃ではないことが理解できる。

ジャーナリズムでの活動研究は池田研究や戸田研究の重要な研究領域である。その中でも『冒険少年』や『少年日本』は、2人が情熱を傾けた活動であったことは確かであろう。雑誌を通して多くの作家たちや読者との共有された理想や、与えた影響などもまた重要な研究領域であることを再確認できた。

貴重なインタビューとともに、大判で紹介されている『冒険少年』や『少年日本』の鮮やかな写真は、当時の少年たちが感じたであろう胸の高鳴りを実感させてくれる好著である。